

# 幻術剣闘士 「死の地下闘技場」



清水龍之介 著

# 1)

わっ、と観客が沸いた。

異様な熱狂だった。

殺し合いが始まったのだ。

片や、まだ14、5歳の青年。身長は160センチくらいで、身体つきも細い。

片や、身の丈180センチはあろうという傷だらけの戦士。筋骨隆々で目は血走り、鬼のようだ。

その狂騒の中心に、あなたはいた。

そう、その青年というのが、あなたであった。

屈強な奴隷たちが二人を十重二十重と囲み、ほんの小さなリングを作る。

端から端まで10歩もないような、小さなリングだ。

その外にはたった数十人の観客。

血を見るのが好き、という頭のイカした貴族たちだ。

——地下剣闘場。

ここでの決着は常に、生きるか死ぬか（デッド・オア・アライブ）だ。

開始の合図とともに、男は斬りかかってくる。

明らかな殺意。

様子見も何もない。

全力の攻撃の威力が相手より勝っていれば勝てる、といった動きだ。

恵まれないあなたの体格を見て、力押しで勝ると踏んだのだろうか。

あなたは知っている。

こういう剣闘士は、長生きできない。

もう、何人殺しただろう。

奴隷として興行師（ラニスタ）に売られて二週間ほど。

あなたは明らかに使い捨ての駒のようであった。

受けた傷も癒えぬほどの頻度で試合を組まれ、その全てに勝利して、生き残った。

運もあった。

これまで、強敵という強敵には出会わなかったからだ。

実力の拮抗する相手に出会い、深い傷を負えば、次の試合は不利になる。

非力な剣士が生き残るには、あまりにも過酷すぎる環境だった。

あなたは思い出す。

ろうそくの明かりに照らされた暗い豪華な部屋を。

それは、地下剣闘場に売られて1週間目のことだった。

「血を見るのがね……好きなのよ。とっても」

女は言った。

女神のように清潔な美貌を持つ、妙齡の女だった。

対して身体つきは、清楚とは真逆にあった。

ともすれば下品なほど、女性らしさが強調されている。

健康な男子なら嫌でも、いけない妄想を掻き立てられてしまいそうだ。

その裸を、ゆるゆるとした薄衣一枚で隠している。

「アントニウスを殺ってくれたあなたには、とっても期待してるの……」

言いながら、鞭を持った手を振り上げる。

アントニウスとは、その日あなたが倒した大柄な男だった。

彼女のお気に入り、何度も彼に殺されたのだという。

あなたがそれを軽々と倒したのを見て、彼女はあなたを、自らの屋敷に呼び出したのだ。

「とっても！」

「ぎゃっ！！」

少年が、悲鳴をあげる。

背中を鞭で打たれたのだ。

彼は後ろ手に縛られて上半身をむき出しにしていたが、絹のような白い肌に赤いミミズ腫れが走っている。

よく見ると、他にも無数に生傷があるようだった。

役者のように美しい少年だった。

歳はきっとあなたとさほど変わらないだろう。

「とっても、素敵だったわ。あなたの試合……」

あなたがアントニウスにじわじわと傷を負わせて倒したのが、ことさら気に入ったらしい。

あなたにとって軽傷を積み重ねて深手へつなげることは正攻法であった。

この女のような趣味があるためにそうした訳ではない。

だがそれは、彼女にとっては胸のすく以上の意味を持った試合内容だったのだ。

女はまた、鞭を振り上げる。

「ひっ！」

少年が顔をひきつらせる。

「こんな風に！」

「ぐうっ！！」

「こんな風に！ なぶって！ いたぶって！ 殺した！ 殺したの！！」

「ああーっ！！」

少年は泣きながら悶絶する。

背中から血を流して、ただただ彼女の責めを受け止めていた。

「……あなた、素敵よ。とっても」

はあはあと荒い息をつき、うつろに濡れた目で女はあなたの裸に指を這わせる。

あなたが眉一つ動かさないのを、気に入ったらしかった。

指が腹筋の凹凸を滑り、胸まで這い上がって、止まる。

「心臓が……動いているわね」

あなたの心臓の鼓動を楽しむように、指の腹を押し付けている。

ヌメヌメとした舌が妖しく光っていた。  
狂気と欲情とが混ざったピンク色の塊だ。

「来なさい」

女があなたの引き締まった腰を掴む。  
その夜から彼女は、あなたの後援者（パトロン）となった。

唸りをあげた刃が、あなたの鼻先を通り過ぎる。  
まるでスローモーションだった。  
渾身の一撃を軽々とかわすと、相手は口からつばを飛ばして吠える。

「来い、オカマ野郎！」

男は下卑た笑い声を上げる。  
リング代わりに二人を取り囲む奴隷たちが、釣られてゲラゲラと笑っている。  
——行くものか。

あなたは無視して、相手を眺めている。  
攻めれば、思わぬ攻撃を受けるかも知れない。  
実力の差は歴然だが、何が起こるかわからないのが剣闘である。  
万が一にも怪我をする訳にはいかない。  
何も起こってはいけないのだ。  
だから、相手の攻撃を見て、それを処理する。

「腰抜け！」

男は耐え切れず、斬りかかってくる。  
また、力に任せた大振りだ。  
切先を重ねて力を加えてやれば、簡単に剣が泳いでしまう。  
相手は大きくよろけ、右半身がガラ空きとなる。

——あなたはどうすべきか？

一瞬の隙を逃さず、首への一撃を見舞う [6](#)へ

胴を狙って手傷を負わせる [13](#)へ

## 2)

「先日の戦いぶり、見事だったわね。ご褒美があるのよ」

彼女はクローゼットを指さす。

開けてみると、そこには特注の剣と鎧、そして盾が入っていた。これはありがたい。

「これで、もっと活躍できるはずよ。期待を裏切らないでね」

あなたは自分の武器と盾、鎧を手に入れた。翌日の朝、あなたはアティアに別れを告げる。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

### 3)

武器のチェックが済んで、階段をさらに地下に下って行くと、その酒場はある。  
あなたは金貨を持っているか？

#### ないなら

酒場には入れない。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

#### 金貨を持っているなら

それを1枚失って酒場に入る。

地下の酒場はいつだって満員で、狂ったように盛り上がっていた。

試合ではした金を掴んだ剣闘士たちのほとんどが、この地下酒場でオケラになるまで飲み明かすのだ。

どうせいつ死ぬか分からぬ命だ。宵越しの金を持っていても仕方がない。

ただし、どんなにこの酒場が盛り上がり行っても、揉め事を起こす者はほとんどいない。

武器を携帯した用心棒が、簡単に取り押さえて、出入り禁止にしてしまうからだ。

地下剣闘場から抜け出せる見込みのない者にとって、この酒場を取り上げられることは、死よりも辛いことだ。

見ると、死神ルーファン一派がテーブルを2つほど独占している。

他の客にちょっかいを掛けるようなことはないようだが、ルーファンはまるで暴君のようで、身内に横暴に振舞っているようだ。酒を吐きかけたり、小突き回したりしている。

また、カウンターの方へ行けば、あなたに気がある素振りの妙齢の給仕が、あなたに意味ありげな視線を送っている。

――あなたはどうすべきか？

ルーファンたちの様子を見る [11](#)へ

給仕を口説く [5](#)へ

## 4)

試合が終わると、あなたの興行師（ラニスタ）のダミアノスは明後日にまた試合を組んだとあなたに告げた。

やれやれ。

コロッセオの剣闘士だったら、考えられないほどのハイペースだ。

彼らは早いものでも一週間は間を開ける。

相手は、とあなたが尋ねると、彼は一瞬目をそらした。

「死神だ」

「……なに？」

あなたは思わず聞き返した。

すると、彼は今度はハッキリと言った。

「死神ルーファンつつったんだよ！」

それは、あなたがこの地下剣闘場でこの相手だけは絶対に戦いたくないと思っていた男だった。

「おい、てめえ、分かってんのか？」

ダミアノスは、あなたの様子が変わらないのを見て、激昂する。

あなたが無表情なのは幼少の頃からの癖だったが、わざわざ申し開きするほどのことでもない。

「俺が何でこんな風に試合を組むと思ってる？ こんな無茶なペースで試合を組まれて、何も思わねえほど馬鹿なのか？」

あなたは何も言い返さず、彼が怒るに任せた。

「ちっ、だんまりか」

彼はあなたの胸ぐらをつかむ。

「てめえが殺したいほど憎いって言ってるんだ！」

壁に押し付けられる。むき出しの土の冷たさが背中にヒヤリと伝わる。

「その小綺麗なツラぁ見ると、吐き気がするぜ。あ？」

彼は自分の顔を指さす。

「俺を見てみる。まともに見られねえだろう。ズタズタよ。誰も寄り付きもしねえ。惚れた女が振り向いたことなど、一度もねえ」

ダミアノスの顔が、憤怒に歪んでいる。

「アティア様は、目も合わせてくれたことはねえ。てめえとはえらい違いだ。ええ、おい。てめえと俺とで、どこが違うってんだ！」

ダミアノスはあなたを乱暴に揺さぶる。壁に頭がぶつかって、土がポロポロと落ちてきた。

「だが、てめえももう終わりだ。死神の野郎に目をつけられちまったんだからな。へっ、てめえも、見ただろうが。女みてえに小さな身体で、熊のような大男たちをいっぺんに殺っちまったのをよ！」

ダミアノスが手を放し、吐き捨てるように言う。

「だから、目立つなといったんだ！ 見てみる。このザマじゃねえか！ てめえがどれだけ腕を持ってようが、育ちきる前に摘まれちまえばそれまでよ！」

「ダミアノス、心配するな」

「なに！？」

ダミアノスが不意を突かれたようにあなたを見る。あなたが口を挟むとは思っていなかったのだろう。

「私は勝つ、と言ったんだ」

あなたは彼を真正面から見据えて、静かに言った。

「どんな手を使ってても」

「……てめえ、ふざけてんのか」

ダミアノスはあなたを睨み殺そうとでもするかのように見すえる。視線が交錯する。

「け」

ダミアノスは低い声で言った。

「だからてめえは、気に食わねえんだ」

彼は背を向け、そのまま行ってしまった。

次の剣闘の時間までは自由時間となる。

あなたは2度、他の場所を訪れることができる。

なお、まだ使っていないければ、あなたは金貨を1枚持っている。

訪問が2度終わったら、[10](#)に進んで試合に臨むこと。

パトロンに会う [9](#)へ

地下酒場へ行く [3](#)へ

鍛冶屋へ行く [7](#)へ

## 5)

あなたは給仕に声をかけ、仕事が終わったら宿舎に忍んで来るように言う。

その晩、給仕はあなたの宿舎にやってきた。

あなたは給仕に構いながら、ルーファンについての話を聞く。

「そうね……癖ってのとはちょっと違うかもしれないけど」

給仕はあなたの腕の中でまどろみながら、話し始める。

「ルーファンは身のこなしに自信があるから、序盤は必ず相手に打たせるわ。初めからいきなり攻撃してくることはないと思う」

あなたがこの情報を信じるなら、ルーファンの弱点を聞かれた時にその時にいる番号に6を足した番号を調べる。意味がつながっていたらそのまま読み進めること。

あなたは給仕に礼を言い、そのまま朝まで彼女をいたわった。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

## 6)

必殺の一撃が、相手の首を掻き切る。  
鮮血が舞い、敵は膝を突いて、どうと倒れる。  
その華麗な剣舞に、わっと場が盛り上がる。  
あなたの評判は好評となる。[4](#)へ。

## 7)

鍛冶屋では、専用の武具を作ってくれる。  
あなたは金貨を持っているか？  
持っているなら、ここで買い物ができる。  
持っていないなら、ここから立ち去る。

自分専用の武器を買う [8](#)へ

自分専用の盾を買う [19](#)へ

## 8)

あなたは自分専用の武器を手に入れた。

毒を持っていれば、それをこの武器に塗ることができる。ないなら、もうここには用はない。鍛冶屋を後にする。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

## 9)

パトロンのアティアの離宮は、外観からは想像もつかないほどの豪華な家具が置かれた部屋であった。

「とっても……素敵な時間だったわ……」

フカフカのベッドに埋もれて、あなたのパロンであるアティアが眩く。

床には後ろ手に縛られた美少年が目隠しをされて転がされている。

時刻はもう夜だ。随分長い時間、彼女の楽しみに付き合っていたものだ。

あなたの評判は好評だろうか？ 好評なら **2** へ。そうでないなら **17** へ。

# 10)

ついに試合の日が来た。

今日の試合は特別らしく、地下のリングへ向かうこととなった。

あなたが自分の武器や防具を持っているなら、それを使うことを許可される。

あなたの興行師であるダミアノスが、あなたを送り出す直前に、長い廊下の途中で言った。

「おい、糞ガキ。いいか。お前は非力で、体力も、素早さもない。死神の野郎に勝てる見込みは、ほとんどゼロだ」

歩きながら、彼は続ける。

「だが、お前には剣のセンスがある。この数週間で、いくらかは身体はできてるはずだ。本当は、もっと時間がありゃ、もっとどうにかなったんだがな。とにかく、奴と泥仕合になっちまえば、お前にも運が回ってくるかも知れねえ。どうにかして……」

彼は途中で言葉を切って、目をそらした。

「くそつたれ。あの死神の野郎、いったい何人、金の卵を殺しゃ気が済むんだ！」

彼はあなたを振り返る。

「おい、糞ガキ。何とかして、生きて帰って来い。言ってるへドが出そうだが、お前は俺の見た中で、一番見どころがある。この戦いを乗り切って、帰ってくれば、俺が、俺の意地をかけてでも、お前をコロッセオのチャンピオンにしてやる。地下剣闘場じゃないぞ。コロッセオだぞ。王様にもお目通りが叶う、本物のチャンピオンだ」

廊下が終わる。

「おい、いいな。もう、お前に掛けるしかねえんだ。俺はもう、俺の剣闘士を奴に殺されるのはまっぴらなんだ。畜生。一人でも。一人でも地下を抜けて、上の闘技場に登録してくれりゃ、こんな所。おい、頼む。勝ってくれ。奴を殺して、俺たちを助けてくれ！」

「心配するな」

あなたはダミアノスを振り返り、うなづく。

「私は勝つ。どんな手を使ってでも」

あなたは闘技場の中央に歩いていく。

わっ、と数百の歓声がああなたの身体に叩きつけられる。

ビリビリと闘技場全体が揺れる。

ものすごい歓声。

中央にはすでに、死神ルーファンが待ち構えている。

試合開始の鐘がなる。

彼は両手に手斧を持っている。防御を捨てた、完全攻撃型か？

両手を下げ、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべている。

あなたは武器を構え、ルーファンに対峙する。

あなたは敵の弱点を知っているか？

知っているなら指定された番号へ、知らないなら [18](#) へ。

## 11)

ルーファンは小柄な男で、ひよろりとした細身の体格をしていたが、誰も彼に対して逆らうことはできないようだった。

ナイフで線を引いたような細い目が、狐のように釣り上がっている。

痩せているように見えたが、間近で見ると、鉄線が束になったような恐ろしい筋肉が皮膚の下に走っているのが分かる。

ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべているが、目の動きは鋭く、神経質そうに見えた。

場は盛り上がっているようだが、ちょっとした事で彼は周りの手下に暴力を振るっており、一種異様な緊張感が漂っていた。

ルーファンは隣にいる美しい顔立ちをした小柄な男をことさら執拗にいたぶっているが、その男は感情を殺したような、苦笑いのような顔でルーファンを見ている。

噂どおりだ。

奴は男色家で、救いようのないサディストだった。

あなたは目深にフードを被り、顔が見えないように注意する。

エールを受け取ると、彼らの会話を聞くことができる位置に移動する。

何か盛り上がっているようだが、なかなか会話の内容は分からない。

突然、隣からガラスをひっかくような甲高い声で話しかけられた。

「おい、てめえクソ野郎？ 俺に何か用かよ？」

心臓がドクン、と跳ねる。

振り向くと、ルーファンが隣に座っている。

なんという男だ。

全く気配を感じる事ができなかった。

彼はあなたを眺めると、小さく笑った。

「お前、明後日殺る敵じゃねえか？ 俺の弱点でも探りに来たのか？ 下らねえ奴だな？ 今すぐ殺されてえか？ あ？」

ルーファンは癪に障る高い声であなたをなじる。

そして、あなたの顔を覗きこむと、目を細めてニヤニヤ笑う。

「犯られてえのか？」

あなたの顔を見て、発情したらしい。

「今日ブチ殺されるか、ここで俺に犯られるか、どっちだ？ あ？ 逃げても、酒場の外に仲間を回しとくから、意味ねえぞ？」

あなたは、ルーファンの取り巻きに目をやる。

あの虐待を受けていた男が、手洗いに向かったのが見えた。

「分かった。準備させてくれ」

あなたはルーファンの顔を見つめると、そう呟く。

「ヘッ！」

ルーファンは唇を釣り上げ、舌なめずりをする。

「てめえ、何だ？ 犯られたくて来たのかよ？ ああ？」  
あなたはルーファンを放って、手洗いに向かう。

手洗いでは、虐待を受けていた美しい男が顔を洗っていた。  
身体も小さく、中性的な雰囲気だ。

幸い、彼しかその場にはいない。

あなたは彼を引っ掴むと、個室に押しこみ、鍵をかけた。

「ひっ……！」

男は呑まれたように言葉をつまらせた。

あなたは彼を正面から見つめる。

男が吸い込まれるようにあなたを見る。

「あ……」

彼は思わず目をそらした。

頬が赤く染まっている。

「おい」

「あ、いや……」

「私を見るんだ」

「いや、いや」

あなたは彼の顎を指で捉え、前を向かせる。

視線が絡み合う。

「ああ……」

彼の瞳は何かを期待するように濡れている。

あなたは低い声でささやく。

「ルーファンを、殺したくないか？」

「……えっ！」

彼は驚き目を見開く。

あなたは彼の口に手を当てて続けた。

「声を上げるな。虐待を受けているのだろう」

男は頷く。

「私にはその力がある。奴の弱点を知っているなら、それを教えてくれ。必ず、ヤツを殺してみせる」

彼はうつむいて、首を振った。

思った以上に、飼いならされているようだった。

「ち」

あなたが背を向けてさっさとその場を離れようとする、彼はあなたの袖を掴んだ。

「ぼ、僕にできることがあれば、なんでもします。でも、僕は何も知らないんです。本当なんです。あいつを殺してくれるなら、本当に、なんでも、なんでもするのに……」

彼はべそをかいてあなたにすがる。

これ以上こんな場所にいても意味がない。

あなたは手洗いを出た。

何か騒いでいるルーファンを尻目に、酒場を脱出する。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

## 1 2)

あなたは武器に毒を塗る。

毒の付いた武器で相手に斬りつけた時、その時にいる番号に4を足した番号を調べる。意味が繋がっていたら、そのまま読み進めること。

もうここには用はない。鍛冶屋を後にする。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

# 13)

翔るように、じわじわと手傷を追わせ、体力を奪っていく。

途中までは威勢の良かった相手も、もはや立っているのもやっとという状態だ。真っ青な顔でせえせえと荒い息をついている。

「クソォああーッ！」

斬りつけてくる相手の剣を叩き落とす。

ほとんど力は残っていなかった。

そのまま足を切って相手を転がし、後ろから胸に剣を突き立てる。

あなたはかすり傷も受けないまま、試合に勝利した。[4](#)へ。

# 14)

ルーファンの情け容赦のない連続攻撃が、あなたの身体に雨のように降り注ぐ。

あなたはもう、防御することもできず、ただただ案山子（サンドバッグ）のようにそれを食らっている。

身体はもうボロボロで、立っているだけの体力もないのに、敵の攻撃によって倒れることも阻まれているのだ。

女の悲鳴。

あれは、アティアか。それとも、赤の他人だろうか。

男の怒鳴り声。

ダミアノスが、声がかれるほどあなたを応援している。

すまない。

私は、約束を破ってしまったな。

あなたは彼の期待に応えられなかったことを残念に思いながら、かすみゆく目をゆっくりと閉じる。

すぐに身体が楽になって、光が広がる。

そこには、亡くなったあなたの父が待っていて、あなたにうなづきかける……。END

# 15)

あなたは振り返る。

「なんでもする、と言ったな」

あなたは彼に念を押す。

「は、はい！」

「ならば剣闘の日、奴の食事にこれを混ぜる。できるか」

あなたは薬の小瓶を差し出した。

「できます。お食事をお持ちするのは、僕の役目なんです。できます。僕なら、できます！」

男の目は潤んでいた。

よほど虐げられているのだろう。

あなたは彼に薬を渡したことで、ルーファンとの試合で「防戦」になったとき、その時にいる番号に2を足した番号を調べることで、その結果を知ることができる。

あなたは彼に別れを告げ、手洗いを出る。

何か騒いでいるルーファンを尻目に、酒場を脱出した。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

## 16)

あなたは素早く彼に走りよると、斬りつける。

ルーファンは飛び下がり、軽々と避ける。

しかし、あなたはそれを予想していたかのように、さらに追いつがって斬りつける。

不意を突かれたのか、ルーファンは避けながらほんの少しだけバランスを崩す。

それを見逃すあなたではなかった。

剣を振り下ろすと見せかけ、途中で止めてさらに跳び込む。

絶妙のフェイントに引っかかったルーファンは、完全にバランスを崩した。

そこに、あなたの追い打ちが見事に決まった。

ルーファンの肩から胸にかけて、大きな傷を負わせた。致命傷にはならなかったが、相当なダメージであるはずだ。[18](#)へ。

# 17)

あなたは彼女に頼んでいたものを確認する。

「ああ、これよ。もう届いているわ」

それは無色透明の液体だった。

カエнтаケというキノコから抽出したもので、体内に取り込まれると体力を奪っていくタイプの毒だ。

「あなた、自分用の武器も持ってないのに、どうやってそれを使おうっていうの？」

そのとおりだ。まずはこれを使う準備をしなければならない。

もし今あなたがすでに武器を手に入れていたのなら、**12**へ進んでその効果を確認する。

そうでないなら毒の小瓶を手に入れる。

これを使う機会に出会ったら、その時にいる番号に4を足した番号を調べる。翌日の朝、

あなたはアティアに別れを告げる。**4**へ進んで次の場所に移動する。

# 18)

あなたはルーファンの攻撃を待ち、それをかわしていくいつもの戦法をとる。

唸りをあげて、ルーファンの攻撃があなたの頭を襲う。

体を後ろにそらし、鼻先でその攻撃を避けた。

あなたの見せ場はそれだけだった。

ルーファンはそのまま間を開けず、もう片方の手で別の角度から攻撃してくる。

体のバランスが崩れているあなたは、それを防御するしかなかった。

「！」

あなたは苦痛に顔をゆがめる。

武器を取り落としてしまいそうなほどの衝撃。

防御をしても、これほどのダメージがあるのだ。

あなたは攻撃にうつることもできず、ただただルーファンの攻撃を防御することしかできない。

防戦一方になりながら、あなたは次第に傷ついていった。[14](#)へ。

# 19)

あなたは自分専用の盾を手に入れた。

もうここには用はない。鍛冶屋を後にする。[4](#)へ進んで次の場所に移動する。

## 20)

ルーファンの攻撃が、急に弱まる。

「はあ、はあ」

彼は、青い顔をして脂汗を流している。

攻め疲れ――ではなさそうだった。

ルーファンが叫ぶ。

「……何だ？ おい、お前、何かしやがったな？ 畜生オツ！」

あなたは構わず一気に間合いを詰め、敵の攻撃を弾きながら突きを繰り出す。

それはまともに相手の顔面を捉え、ルーファンは糸の切れた操り人形のように、その場に崩れ落ちた。

地の底から湧き上がるような歓声が、あなたを包み込む。

あなたの勝利だ。21へ。

## 21)

荷馬車が揺られている。  
 城下町への道を上っていく荷馬車である。  
 中に積まれた荷は、奴隷や武具である。  
 平たく言うと、剣闘士たちであった。  
 逃げられぬよう、檻に繋がれている。  
 だが、がんじがらめというわけではない。  
 その辺りが、興行師の性格を反映している。

「おい、バーンハード」

その荷——興行師のダミアノスが、檻の中のあなたに話しかけた。  
 相変わらず、ひどい顔だ。  
 鼻は潰れ、耳もひしゃげて、目は片方ない。  
 だが、笑うと、不思議と愛嬌があった。

「ああ」

あなたは檻の中から返事をする。

「ああ、そっちに居やがったか。よっこらせ……っと。ったく。てめえも、恐ろしい野郎だぜ」

ダミアノスは檻にもたれかかって、背中越しにあなたに言う。

「まさか、全て計算ずくとはな。だがよ、死神の野郎、ありゃあ、自業自得ってもんだぜ」

ダミアノスは死神ルーファンに愛弟子を何人も殺されてきたので、その恨みだと言いたいのだろう。

実際、自業自得といえばそのとおりだった。

彼も仲間を大事にしていれば、あなたの付け入る隙はなかったのだ。

死神ルーファンは自分の興行師にはたらきかけて、自分を脅かしそうな新人を見つけると、昇格戦などと理由をつけ、まだ成長しないうちに自分と戦うように仕組んできた。ダミアノスはあなたが死神に目をつけられる前に、彼を倒すだけの実力をつけさせようとしていたらしい。

「まあ、正直に言うぜ。お前を鍛えようとしたってのは、半分が本当で、半分が嘘だ。死んじまっても構わねえと思っていた。おっと、怒るなよ。今は悪かったと思ってるんだからよ」

「怒っちゃいないさ」

「そうけえ。まあ、そうかもな。でよ、何であんな無茶なことをしたかってえと、まあ、お前が気に食わねえってのもあったが、あれだ。おめえさん、ほうぼうから恨みを買ってやがるらしいな」

あなたはニヤリと笑った。

「懸賞金でもかかっていたか」

「なんでえ、知ってやがったか。まあ、それとは全く逆だがな。お前が命を狙われているから、俺のところにかくまってくれと言われたのよ。おかげでお前の値段は格安だったかな。だが、こりゃあ面倒ごとになると思っよ。早く終わらしちまおうと思っただな」

「そうか」

「へッ、つくづく、不思議な野郎だな、お前もよ。そんな歳で、命のやりとりを平気でしやがる」

あなたはただうなづく。

分家と宗家で秘術秘宝の争奪戦をしている、などと言ってもしょうがないし、聞かせることでとぼっちりを与えるかも知れない。

分家の者の中には、記憶を操る秘術を持っている者もいるかも知れない。

「にしてもよオ、アティア様は本当に、女神のようなお人だな！」

ダミアノスは上機嫌に言う。

「アティア様がお前を下位剣闘士に推薦して下さったおかげで、こうやって俺も城下町に訓練所を構える事ができるんだからな」

わっはっは、とダミアノスが笑うと、剣闘士の皆も釣られて盛り上がる。

あなたはまた、「アティアが本当に女神なのか」という言葉を飲み込んで、神妙にうなづかなければならなかった。

ダミアノスは手を伸ばし、上機嫌にあなたの肩を叩く。

「おい、どうしたバーンハード。おめえにはこれからも、バンバン出世して、コロッセオのチャンピオンになってもらわにゃならんからな。ビシビシしごくぞ！ がっはっは！」

「……」

やれやれ、とあなたはため息をついた。

**END**

# ネタバレマッププレゼント！

From：清水龍之介

幻術剣闘士を遊んでくださって、ありがとうございます。  
どうでしたか？  
短いゲームでしたが、楽しめましたでしょうか。

作者というのは、作品の感想を頂くのが何より好きなもので、僕もその例に漏れません。  
よろしければ、アンケートに一言ご感想を頂けないでしょうか？  
頂けると、僕は部屋でちょっと踊りを踊るくらい嬉しくなります。

そのおかえしと言ってはなんですが、幻術剣闘士を遊びつくす「**ネタバレマップ**」を用意していますので、それを差し上げます。  
これはFT新聞をタイムリーで遊んで下さっているあなたにしか手に入れることができない  
ものです。（製品版を買った人にも手に入れることはできません）  
これを見てゲームを遊ぶと、また違った見え方になって、独特の面白さがあるものです。

本当に一言でかまいませんので、ぜひアンケートにお答え下さい。  
よろしくお願ひします。

[アンケートはこちら](#)

——清水龍之介

P.S.  
バーンハードだって、最初から分かってましたか？笑

P.P.S.  
バーンハードを知らないあなた。「剣闘士ユーク」もオススメです！

# FT新聞ご購入のオススメ

From：清水龍之介

FT新聞ゲームブックを遊んでくださって、ありがとうございます。

もしこの物語が気に入って、あなたが新しいゲームブックを楽しんでみたいのなら、FT新聞を購入することをお勧めします。

## [FT新聞登録フォーム](#)

### ・FT新聞について

このたびファンタジーゲーム製作者集団「FT書房」が新しい試みを始めました。あなたの携帯電話に、私たちの新聞を届ける「FT新聞」です。この新聞の発行にあたって、期間限定で、無料のリーディングメンバーを募集しようと思っています。あなたに、まだ読者の少ないこの新しい新聞の、初期の読者になって貰いたいのです。

### ・どうしてFT新聞をはじめたか

僕らは「ゲームブックファン」はマイナーです。マイナーは、ちょっとした時代のきまぐれで存在がかき消されてしまいます。基本的に、本が出なくなったら終わりです。すごく残酷な考え方をすると、ゲームブックは一度「終わった」存在なのかもしれません。熱は冷め、新作はなかなか出ない。

人に「ゲームブックのさあ...」と話しても、「なに？ ああ、昔の」とギャップがある。僕らにとっては「今」楽しいことなのに、です。

まだゲームブックが好きで、「ゲームブックはまだ終わってない！」と力強い炎を燃やしている人もいるのに、一人ひとりがバラバラの状態。これは、儂い炎です。名作は誕生せず、長いあいだ放置されたら、ゲームブックの炎は保ち続けられません。小さな炎は、どうすればいいのでしょうか？

そう、小さな炎は、寄り添えばいい。

炎と炎が重なると、より大きな炎になる。大きな炎はより大きなものに熱を伝え、影響の

波はたくさんのをリレーする。

炎と炎が寄り添える場所。これが「FT新聞」のコンセプトです。ゲームブックが生き残るには、そしてゲームブックが「文化」として認められるようになるには、数少ない同志たちと手を取り合う必要があります。あなたの炎が、ゲームブックを文化にまで押し上げる力になるのです。どうぞ、あなたの力をお貸し下さい。

・ FT新聞で得られるもの

「FT新聞」はあなたに、新しい生活を届けるように、たくさんのギフトをお届けします。

■ 毎週、小さなゲームブックをプレゼント

テキスト形式の数十パラグラフで構成された手軽に遊べるゲームブックを月に4～5回お届けします。あなたの携帯電話に届くこの楽しいゲームブックは無料で、この新聞で初めて発表されます。

■ 毎朝お届け

毎日あなたの元へ、ファンタジーの世界から新聞が届きます。通勤中も、ちょっとした休み時間も、あなたの生活空間が、剣と魔法のファンタジーの世界に変わります。

■ すべて無料

ゲームブックも日刊のコンテンツもゲームリプレイも何もかも、全て無料です。あなたはお金を失うリスクなしですべてのコンテンツを存分に楽しむことができます。

■ FT作品が2倍楽しい

FT作家陣が執筆するので、作品の制作秘話、裏設定、世界観など、彼らの世界の驚きの事実を目にするでしょう。裏話で、気に入っている作品は何倍も楽しくなります。

■ ゲームブックの作り方が学べる

私たちはゲームブックを作り始めてもう6年になりますが、そのコツやHOWTOを惜しみなくお教えします。具体的で役立つ知識はあなたのゲーム制作、小説執筆など物語を作る力を鍛え、レベルアップさせます。特にゲームブックを作っているなら、私たちのノウハウは具体的に制作の最短距離を指し示せるでしょう。

- ゲームブック業界のウラ話  
創土社、フーゴ・ハル氏など、現在のゲームブック業界を牽引する方々との交流で知った業界の裏話を、できる範囲でお届けします。あなたの知らない業界の本当の顔とは？
- まだ見ぬ世界のワールドガイド  
FT書房のファンタジー世界「アランツァ」のモンスターを取り上げて詳しく解説する「オレニアックス生物学」。あなたは個性豊かな英雄候補たちと一緒にこの講義を受けることになります。きっと想像力を刺激されて、剣と魔法の世界をリアルに、鮮明に思い描くことでしょう。
- 無料でFT作品が買えるアランツァ金貨プレゼント  
電子商品や、オマケなどが無料で手に入るFT書房世界の通貨、アランツァ金貨を手に入れる機会があります。FT作品を何倍も面白くする小説版や攻略法、ゲームブックなどもラインナップに入る予定です。
- 新作情報がいち早く  
FT書房の次の作品の情報をいち早く手に入れるなら、FT新聞はうってつけです。作者から思わぬこぼれ話が聞けるかもしれません。
- 豪華な作家陣  
執筆者は杉本=ヨハネ、清水龍之介、ロア=スペイダーなど、FT書房で作品を書いているメンバーです。彼らと触れ合い、その赤裸々な告白が楽しめるのはFT新聞だけです。
- ゲームリプレイ  
FT新聞ではゲームブックのリプレイも楽しめます。ゲームブックのプレイ記録を読み物の形式にまとめたのがリプレイです。あなたはゲームを実際を買ってプレイしなくてもその作品を読んで楽しむことができます。
- ファンタジーこぼれ話  
中世ヨーロッパのびっくりするようなトリビアはあなたの生活の楽しい話題になるでしょう。また、作品を作るときの思わぬアイデアの元になるかもしれません。現在、人気のコーナーです。

- タイムリーなファンタジーの話題をお届け  
新作ゲームブック、新作ファンタジー映画など、タイムリーなニュースについて、FTのメンバーがコメントします。あなたは最新のファンタジー情報をいち早く手に入れます。
- 5分で読める手軽さ  
一つ一つ新聞が一口サイズの記事（1000文字程度）なので、ちょっと時間が空いた暇な時間にも気軽に読めます。胃もたれしないあっさりした気軽なコラムです。

ここに挙げたあなたへのギフトはFT新聞の楽しみのまだほんの一部です。あなたがFT新聞の無料リーディングメンバーになりたいと思ったら、下の登録フォームから今すぐご登録下さい。今なら無料でFT新聞を受け取る事ができます。もし不要になれば、ワンクリックで解除できます。FT新聞はあなたの生活にファンタジーの彩りを加えることをお約束します。

FT新聞の無料リーディングメンバーになるにはこちらにご登録ください。

### [FT新聞登録フォーム](#)

#### P.S

もういちど触れておきますが、FT新聞はあなたに毎週ゲームブックをお届けしながら、ゲームブックの作り方、ゲームブックリプレイ、ゲームブック業界裏話、最新ファンタジー情報、FT作品裏話、ファンタジートリビアなど楽しいコンテンツを毎日お届けするもので、全て無料です。

#### P.P.S

FT新聞のコンテンツは、ほとんどが限定コンテンツです。他の媒体（例えばFTブログなど）でバックナンバーを見たりすることは、原則的にできません。毎週のゲームブックは、単行本化しないかぎり、FT新聞でしか遊ぶことのできないゲームブックです。

#### P.P.P.S

現在、たくさんの方から応援のメッセージをいただいています。無料メンバーに登録している200人より、190通を超えるメッセージを頂きました。次のページで、その一部を紹介します。

# FT新聞ご感想

・作品制作が垣間見られるところがいい。休み時間に読めるボリュームで、継続的に(ほぼ毎日)新しい情報を得られるので読んでいる。名古屋市・34歳・Yさん

・毎朝・毎日(昼休みに再読)の楽しみです。雑談(ファンタジーの雑学知識)も面白い。GB作成の裏話とか「すごい」と思いました。山口県・37歳・吉田大助さん

・自分の知らない世界をチラッと覗き見している気分で、毎回楽しみにしています。専用フォルダも作ってしまいました！岩手県・25歳・紺野有花さん

・ちょっとした時間でも気軽に読める事と、こういった作り手の方々との直のやり取りのできるところがいいです(今は媒体がPCメンテ中でケータイからなので手間取ってますが)。リプレイとかもかなりやり込んでチャート表など作ってた「宝石島」なので、再度本と表を引っ張り出してニヤニヤしてました。こういった他の方々の視点というのも面白くていいですね。名無しさん

昔、ゲームブックやTRPGにハマっていたんですが、今は忙しさもあり、なかなかプレイは出来ません。FT書房のメルマガなら、手軽にファンタジーの体験が出来るため、感謝しております。兵庫県・36歳・山崎一星さん

・Timely , Interesting ,and Interests at gamebook writers.I would like to read Negraarena Magazin. 福岡県・40歳・Tさん

・短い時間にも手軽に読める事、また時間がなくても自分の好きなペースでもまとめて楽しめる事、そして何より、こういったゲームブックを作っている方々とも、やり取りができ、一緒に時間を共有できる事が読み続ける一番の大きな理由です。福岡県・40歳・堤俊道さん

・大衆文化としては廃れてしまったゲームブックへの熱い思いを今でも感じさせてくれる著者の皆様の心意気に惚れてしまった(笑) 神奈川県・37歳・Sさん

・クリエイターがどういったプロセス、思考、思いでものづくりをしているのかが解って面白い。ボードゲームの話題も取り扱って欲しい。（批評や攻略など）東京都・41歳・Fさん

・ゲームブックが好きで、クリエイティブな作業や情報に触れる事で自分の中の創作意欲を刺激したいので読み続けています。 東京都・42歳・Sさん

・25年以上前から、ゲームブックのファンだから読んでいます。過去の名作も取り上げて欲しいです。 東京都・Sさん

・日常的にゲームブックテイストを感じたいために読んでいます。 東京都・41歳・たけさん

・ゲームノベルと雑学記事が楽しい。 熊本県・42歳・Sさん

・ライターさんが多彩で、メールマガジンの内容も様々で、飽きない。 長野県・32歳・竹内さん

・何というか臨場感があって読み物としておもしろい。リプレイが特におもしろい。 神奈川県・43歳・Hさん

・ゲームブックの作り方を読めたり、ファンタジーのこぼれ話を聞けたり、いろんな裏話を聞けるのがすごい興味が湧いた。 京都府・26歳・Wさん

・製作者の考えや方法等の知る機会の少ない話が多い 千葉県・27歳・Tさん

・ゲームブックの情報が得られる珍しいメルマガです。 東京都・27歳・Kさん

・毎回、ゲームブックのいろいろなテーマ話が聞ける。 東京都・40歳・Fさん

・ゲームブックが好きでFT書房さんのおかげでマイブーム再燃中です。 神奈川県・44歳・古谷賢一さん

・楽しく、またゲームブックを夢中になって読んでいたころを懐かしく思い出します。

北海道・38歳・Mさん

・ゲームブックが好き。で、FT書房の作品も好き。 千葉県・42歳・新井一博さん

・ゲームブックはもう商売としては成り立たないかもわかりませんが、あの時代に燃えたものだから今の時代にやるのなら応援したい。 香川県・40歳・川根委三さん

・ゲームブックは青春の重要な思い出ですので、つながってほしいという気持ちがあります。 東京都・43歳・Nさん

・ゲームブックが好きで、もっと良くFT書房やメンバーの皆さんのことを知りたいです。 鹿児島県・37歳・吉永友和さん

・FT書房さんの裏事情など、いろいろと知る事ができるのがいい。あとやはりGBが楽しみです？ 神奈川県・35歳・斉藤実さん

・ゲームブックの持つ楽しさに浸ることができる。 福岡県・36歳・Yさん

・FT書房様の刊行物に興味があります。裏話的なものも面白いと感じます。 宮崎県・38歳・Oさん

・ゲームブックに昔はまっていたので、懐かしさを感じています。 成田市・36歳・Kさん

・読んでいて楽しい。ゲームブック文化を残そうとしている活動を応援したい。 埼玉県・37歳・竹内さん

・無料で手軽にゲームブックができるのはうれしい。FTマガジンとウォー・ロック・クロニクルの情報がほしい。 埼玉県・40歳・新堀さん

・読み物として面白いので読んでいます。 神奈川県・37歳・Kさん

・卓ゲが好きだし、卓ゲを頑張って提供してくれている人たちがいるのが嬉しい。一本でも多くのゲームブックを遊びたい気持ちを満たしてくれる。中世のコラムも興味深く面白い。 東京都・36歳・丸山泰雄さん

・杉本ヨハネさんも清水さんも、軽めの語り口が絶妙でとても面白いです。 兵庫県・38歳・Kさん

・ゲームブックが好きで、この新聞を読んでも次回作の楽しみが膨らみます。 東京都・22歳・関根賢太郎さん

・あの懐かしいウォーロック誌の空気に触れることができるから。ゲームブックを愛しているから。 北海道・38歳・Yさん

・連載されているゲームブックやコラム的な記事が読みたくて購読しています。 香川県・Hさん

・昔に親しんだ趣味にあった内容で、懐かしく楽しんでいるから。 富山県・39歳・Nさん